

後 崇 光 院 統 歌 百 首

— 図書寮叢刊『後崇光院歌合詠草類』補遺 —

後崇光院太上天皇（貞成親王）の詠歌については、昭和五十二年度の図書寮叢刊として『後崇光院歌合詠草類』が当部より刊行された（本号彙報参照）。その刊行後、当部では後崇光院宸筆の詠草一卷を購入した。後述するように、この一本は内容的には前記『後崇光院歌合詠草類』に所収すべきものである。ここに図書寮叢刊の補遺としてその全文を翻刻紹介することとする。

書誌・筆者

『後崇光院統歌百首』卷子本一卷。当部函号五〇九・九三。表紙は紺地に金糸で四目菱繋ぎに牡丹唐草を配した鍛子。外題はない。軸頭は螺鈿の蝶を配した紫檀。本文料紙は楮紙（第一紙堅二九・八糎、横四二・五糎、第二紙以下は横四三・七糎）。本文墨付一一紙。加証奥書一紙の計一二紙。裏面縫目毎に丸黒印（印文不明）あり。本文巻頭は「統歌百首」とあり、部立分けをせずに続けて和歌本文が書かれている（図版参照）。上段に歌題を置き和歌は上下句分けの二行書きである。蓋表に「後崇光院之一軸□□」、蓋裏に「昭和廿参年八月六日入手（花押）」とある江戸期の桐

箱に入る。この外に、牛庵仙室（明暦二年没）の添状、

（端裏宛書）
牛庵老貴報

牛庵仙室

御一軸者」後崇光院宸筆無」疑奉存候、代物之儀被仰越候、不案内ニ候はん、金子三枚程可」仕候哉、猶期貴面候、恐惶謹言

極月十六日

仙室（花押）

とあり、また古筆了意（天保五年没）の極札が添えられている。巻末の加証奥書は二種あり、一は本書所持者の証で、「此一卷崇光院御宸筆也、尤重宝々々 主梵菊」とある。梵菊なる人物については未詳であるが、筆跡は江戸初期のものと認められる。いま一は、古筆了佐（寛文二年没）の極で、「右如奥書崇光院道欽御真跡無紛之者也 古筆了佐（花押）」とある。梵菊の証は「崇光院」と「後崇光院」との混乱があるが、了佐は右の「崇光院」をうけて、後崇光院の法名「道欽」を注している。図書寮叢刊『後崇光院歌合詠草類』で紹介した当部蔵の伏見宮伝来の後崇光院の宸筆類との比較からも本書は後崇光院の宸筆と認められる。

内容・成立

本書所収の百首は、後崇光院の初期の詠歌を収めるといわれる『菊葉和歌集』および当部刊行の『後崇光院歌合詠草類』所収の詠歌との重複は認められないが、後崇光院の家集『沙玉和歌集』との間には九首（内60・61の二首は類歌とも考えられる）の重複が認められる。『私家集大成』中世Ⅲによって重複歌九首をみると次のようになる。（上段より、本百首の番号、歌題、歌の異同箇所、『私家集大成』所収番号、歌題、歌の異同箇所の順に示す。）

7 「里梅」、歌異同なし—44 『沙玉和歌集』（以下は略す）Ⅲ 25 「里落梅」。

10 「帰雁」、歌題、歌ともに異同なし—44 Ⅲ 31。

13 「待花」、歌題、歌ともに異同なし—44 Ⅲ 40。

42 「夜鹿」、歌異同なし—44 Ⅲ 186 「月前鹿」。

60 「寒草」、歌題異同なし、下句「霜のかれふはとふ人もなし」—43 Ⅱ

278 「誰かはとはむ霜かれの色」。

61 「氷初結」、下句「むすひそむるは氷なりけり」—43 Ⅱ 598 「井辺氷、

「むすひかへたるうす氷哉」。

68 「閑庭雪」、歌異同なし—44 Ⅲ 276 「閑中雪」。

74 「見恋」、歌題、歌ともに異同なし—42 Ⅰ 189。

90 「雑鳥」、歌題、歌ともに異同なし—42 Ⅰ 186。

上記のように、本書は後崇光院の自詠、自筆の一本であることがわかる。

では次に本書の成立について考えてみたい。後崇光院の百首歌は、御日記の『看聞日記』やその他現存資料からかなりな数が知られている。その中でも特に注意されるのは、毎年重陽の日を期して行なわれた、四絃音曲和歌の百日稽古である。「和歌者今出川中納言短冊進之」（『看聞日記』応永二十四年九月九日条）、「和歌百首毎日一首。同前」（『看聞日記』永享四年九月九日条）等とあるようにこの稽古百首は短冊を用いた着到形式の百首であることが知られる。本書の百首は、後崇光院自身が「続歌」と記していること、書誌の項でみたように、部立せずに題を上段に和歌を上下句分けの二行書きにしていること、本文巻末に「愚点三十七首」（図版参照）と点者の注があることから、短冊を用いた続歌百首を後に点を乞うために短冊の書式や継がれた形態そのままに書き写されたものであると考えられる。「続歌」については、石田吉貞氏、橋本不美男氏、伊地知鉄男氏等の見解があるが、不明な点が多くある。いま上記諸先学の見解をまとめてみると、「和歌をつぎつぎと詠みつぎ」（石田・橋本氏）、その料紙としては「短冊が用いられる」（伊地知・橋本氏）、「この短冊を綴じ合わせることに統の意味を考える」（伊地知氏）となる。鎌倉中期頃より流行した続歌は、時を同じくして登場した「短冊」という新しい詠歌料紙の発達と相俟って、南北朝・室町期の盛行をみるに至る。本書はまさにその中の一つといえよう。さて、続歌を上記のように考えると、先述の短冊を用いた百日稽古百首も続歌として行なわれた可能性もあり、本書の成立にも関わりをもつかとも思われるが『看聞日

記』の稽古百首の記事からは確証は得られない。

次に巻末に注記を加えている点者について考えてみる。『後崇光院歌合詠草類』で紹介したように、後崇光院の和歌に点を施した人物で現存資料によってその筆跡が確認されるのは、栄仁親王（図書寮叢刊の『後崇光院歌合詠草類』の所収番号と当部函架番号とで示す。三伏・一二、五伏・一三、七伏・三六一）、四辻善成（一伏・九、二伏・一〇）、飛鳥井宋雅（四伏・一九、六伏・一一）の三人である。この内では本書の筆跡は宋雅のものに一番近いが確証はない。『看聞日記』で後崇光院が百首の点を宋雅に乞うているのは、応永二十九年の重陽よりの百日稽古百首を翌三十年十月二十一日に「抑去年百首和歌詠之、正永同詠。兩人詠。為百番歌合勝負点事。飛鳥井中納言入道ニ令申」と記している一例がある。

本書の成立時期としては、『沙玉和歌集』と重複歌をもつ点から、一応同書所収歌の詠歌時期の応永十年から永享六年の間と考えておくこととしたい。

凡 例

翻刻にあたって、異体・略体は正字に改めたが、当用漢字・通用漢字にあるものは、適宜使用した（例、哥↓歌、鴈↓雁）。各歌頭に一連番号を付した。紙継ぎを「」で示した。歌題、和歌の書式は本文の形態通りとした。

（小池 一行）

続歌百首

- 1 暁立 ひとゝせははやつきはつる鐘のおとの
春 春にあげゆく空そのときき
- 2 峰霞 たちわたるかすみの色もつくはねの
松をこめてやみとりなるらむ
- 3 谷鶯 春しらぬ身は山さとにすみわひぬ
宮ここにさそへ谷のうくひす
- 4 残雪 三芳野は春もみ雪のふるさとを
花よりさきにとふ人はなし
- 5 若菜 たれか今朝雪まのわかなつみそめて
我よりさきにあとをみすらむ
- 6 野梅 鶯にやとやからまし梅かえの
あるしもしらぬ野への木の本「」
- 7 里梅 ちりゆくはくるしき物を梅の花
里をまかれすさそふ春風
- 8 春月 かすむ夜のならひを春にかこちても
月はなみたを又やうらみむ
- 9 春曙 月と花のかすみかはれる明ほのを
いつのなさけにたとへてかみむ

10 帰雁 こし秋はきりにかけつる玉章の

かへしもかすむ春の雁かね

11 春雨 なへて世の花のひもとく春雨の

ふる木のさくらめくみもらすな

12 岸柳 河なみに船さしくたす縄手とや

いとくりなかつ岸の青柳

13 待花 さかりなる比になさはやいたつらに

花まつ程の春の日かすを

14 初花 さきそむるこすゑなれはや山さくら

みさりし雲の今朝はかほれる

15 見花 春をへて去年みしよりも色そふは

花や老木にさきまさるらむ

16 花盛 よし野山松さへ雲にうつもれて

花にもれたるこすゑたになし」二

17 落花 おしからぬ身にやかへましさくら花

さてしもちらぬならひなりせは

18 款冬 口なしのこたへぬ色にちきるかな

又もきてみむ井手の山吹

19 池藤 池水に岸の松かせ吹ぬらし

波になみよる藤の下影

20 暮春 花とりのあかね別はなれにしを

としにそへてもおしき春かな

21 首夏 一つのまに春をわすれて郭公

まつにこゝろのはやうつるらむ

22 更衣 夏衣こゝろとかへて花染の

かたみをおしとなに思ひけむ

23 卯花 卯の花のかきねつゝきの通路は

雪をそわくる玉川の里

24 待時 尋かねかへる山路にほとゝぎす

なをもこゝやと松のむらたち

25 聞郭 時鳥夢かとたとる一こゑに

ねさめてみればあり明の月

26 廬橘 袖の香をいかに残してたち花は

むかしをしのふ妻となるらむ」三

27 早苗 引うふる山田のさなへ露ちりて

むら雨はるゝ松かせそふく

28 五月 さみたれのはれぬ日かすも久かたの

月はいく夜のやみにまよはむ

29 鶉河 うかひするしつ男はいかにかゝり火の

こかれん後の世をはしらすや

30 夏月 すゝむとて月みる庭のやすらひに

槇の戸口もさゝてあけぬる

31 藜螢 夕やみの月にかはりて螢火の

光いさよふ野への草むら

32 夏草 うへけるもこゝろのあれや山かつの

あるゝかきほにさける瞿麦

33 夕立 草も木も露はみたれて夕立の

すゝしきあとに秋かせそ吹

34 納涼 松のかけ山路のおくを尋ても

夏にしられぬ宿もとめてん

35 夏祓 小蠅なす神の心もおさまりて

御祓する身にうれへあらめや」^四

36 早秋 たつ秋は人のこゝろにしられけり

かならず風のおとにつけねと

37 七夕 一とせにひと夜はかりと七夕の

如何なる秋か契をきけん

38 萩風 きゝわひぬうき世の秋のことはりも

さそなならひの萩のうは風

39 萩露 花の色のわきてえならぬ萩萩に

露もこゝろをうつしてやをく

40 女郎 むすひつる露やうらみん女郎花

花 まくらさためすなひく秋かせ

41 夕虫 あさちふの露の床にもやとれとや

くるれは月をまつむしの声

42 夜鹿 月ふくる軒端の山の秋かせに

まくらにおつるさほしかのこゑ

43 曉雁 あまつ雁ねさめの窓にこゑおちて

月もまくらにあり明のそら

44 秋夕 おほかたのゆふへはかりのあはれにて

うき身の秋をなけかすもかな

45 山月 一坂もいつこえてみむ位やま

ふもとにしつむ秋の夜の月」^五

46 野月 春日野の露ももらさすやとる月

神のめくみもかくやあまねき

47 河月 さす棹は浪にさはらて月かけの

こほりにくたす宇治の川舟

48 江月 蘆まにそさはる影をもみしま江や

浪路くまなき秋の夜の月

49 浦月 にはてるや月影よするさゝ浪の

こほらてこほる志賀の浦風

50 渡霧 いくにか船をもとめんやともなき

さのゝわたりの秋の夕きり

51 擣衣 誰とても夜さむはしるをしつのためか

たへすもひとり衣うつなり

52 籬菊 おりにあへは花みし春もわすられつ

きくのまかきにあり明の月

53 庭紅 木の本の苔さへ色に染てけり

葉 もみち吹しく秋かせの庭

54 杜紅 秋ふかき色ともみえすうすもみち

葉 柞の森のこす多はかりは

55 九月 なか月と名にはふ秋もさゝ竹の

尽 一夜はかりの夢になりぬる」六

56 初冬 秋をこそおとにしらせし松かせの

はけしくかわる冬をつくなり

57 時雨 おはつ瀬の山かせおくるうき雲は

ふしみの里に時雨きにけり

58 落葉 一かたにさそふあらしの吹かけて

木の葉のうへにこの葉ちる也

59 野霜 秋ならて身にしむ色は冬も又

あり明こはる野への朝霜

60 寒草 露さえし秋のゆくゑの草の原

霜のかれふはとふ人もなし

61 氷初 汲なれし岩井の水を冬くれは

結 むすひそむるは氷なりけり

62 冬月 名にたちし秋よりもなを冬の空

こはれる月の影のさやけさ

63 磯千 塩の山月もさしての磯波に

鳥 千とりとわたる冬の夕くれ

64 寒夜 夜をさむみ蘆まにかゝる水鳥も

水鳥 うきねをかへて遠さかりゆく

65 鷹狩 み雪ふる狩庭の鳥立みえぬまで」七

わくれはうつむ柴の下道

66 浅雪 草も木もなひかぬほとこのうす雪は

それしもふかきなさけとそみる

67 積雪 うつもれてそのこす多とはみえねとも

松のすかたにつもる白雪

68 閑庭 とふ人もあらはや庭にあともみむ

雪 つもるまゝなる雪の山さと

69 神楽 見もきくもあなおもしろや星うたふ

庭火のうへに在明の月

70 歳暮 ひとゝせはむなしき夢にくらしきて

またぬ春にも又やあはまし

71 初恋 いつのまになみたは色に出ぬらむ

昨日けふこそ物はおもふに

72 忍恋 ふみもみぬ恋路にまよふ忍山

こゝろのおくに松かせそ吹

73 聞恋 うき人のゆくゑは萩の風なれや

おとをきくにも袖はぬれけり

74 見恋 つれなしとみるにもやかて涙そふ

人のこゝろやあり明の月」ハ

75 待恋 させも草たのめし露のことの葉に

命をかけて待もはかなし

76 祈恋 貴船川神のこゝろもはやからは

いのる逢瀬のよとますもかな

77 契恋 千世までとあかぬ心に契かな

さらぬ別をしらぬかほにて

78 不逢 つゐにさてあはての浦のすて小船

恋 こかれわひてやおもひしつまん

79 偽恋 浪こえん物とはかねて契きや

つらきこゝろのすゑの松山

80 遇恋 うちいてむことの葉そなき新枕

またいひなれぬしたのおもひは

81 別恋 いつかたもかたみをわけてのこせとや

袖のわかれに月そ友なふ

82 後朝 立かへりみせはや人に朝露の

恋 道芝わけし袖のしほれを

83 旅宿 むすひすつる野路のたひねの篠まくら

恋 一夜の夢に物やおもはむ

84 名所 たかこゆる相坂なれは関守の」九

恋 うき身ひとつにゆるしかぬらん

85 絶恋 行すゑをかけて契しかひもなし

一夜にたゆる夢の浮橋

86 天象 いつはりのなき世なりけり雨露の

時をたかへぬ恵はかりは

87 地儀 清見かた雲井の富士をみてもまつ

とまるこゝろや浪の関守

88 雑木 おとたてぬひまこそなけれ山かせの

やとりは松のこすゑなりけり

89 雑草 おく山のいはねのうへの苔むしろ

露より外にしく物そなき

90 雑鳥 いたつらに音をなく和歌の浦千鳥

91 雑獸 世の人なみに跡も付はや
月のいる葉やまの峰にこゑすなり

92 雑虫 なれもあはれやましならなくらん
すてかねてたゞ我からの身のうさに
もにすむ虫の名さへうらめし

93 雑物 水茎のあとある事をかきとむる
ふみやむかしのかたみなるらん」一〇

64 居所 うき世をはしらてすむへき山里に
松のあらしのあまりさひしき

95 羈旅 昨日こえし山は雲井に成にけり
けふは船路のあとの浪まに

96 懷旧 おもひ出のむかしは身にもありかほに
なとこしかたの恋しかるらむ

97 述懷 人しれぬみやまかくれの朽木にも
御代のめくみの春にあははや

98 釈教 如何にして法のともし火かゝけても
くらきにまどふ身を照すへき

99 神祇 あま照す神のひかりもます鏡
くもりなき世の君あふくとて

100 祝言 君か代はあまの戸わたる月影の
いくめぐりともかきりさらめや

愚点三十七首」一二

重宝々々 主梵菊

此一卷、崇光院御震筆也、尤

右如奥書崇光院道欽御真跡

無紛之者也

古筆 了佐(花押)」二三

了佐(花押)」二三

了佐(花押)」二三

了佐(花押)」二三

了佐(花押)」二三

